

ソーシャルワークへの新たな視差と示唆 ～JASW香川大会への御礼と会長メッセージ～

2016年度全国大会が香川の地・高松市と小豆島で開催され、北は北海道から南は沖縄まで文字通り全国各地から参加をして頂き盛会のうちを終了したことに対し心から感謝申し上げます。

企画から、実行まで香川県ソーシャルワーカー協会の川西基雄会長をはじめ、県社協、香川県、高松市、各種社会福祉職能団体のご支援を賜りましたことを改めて御礼申し上げます。

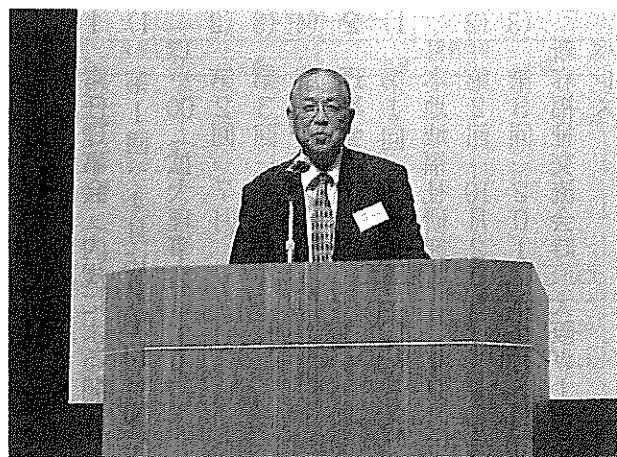
内容的にも、国際ソーシャルワーカー連盟グローバル第一副会長である木村真理子氏によるグローバル定義のめぐる世界情勢を踏まえた精緻な分析、ソーシャルワークの位置と機能、果たすべき機能や運動の展開まで多彩な考察をして頂きました。また、JASW青年部においては、高石豪氏らによる最新のICTを活用した研修やスーパービジョンの展開を公開して頂き、これからの研修のあり方やICTの福祉実践への応用と展望が示唆されたことは、画期的で新たな局面を示すとともに実用化の可能性を実証して頂いた。さらに基調講演として、甘利彩子氏による国際芸術活動を通じて展開

された「地域づくり」や「まちおこし」との関連が極めて示唆に富む内容であり、これからの「まちおこし」「まちづくり」に夢と希望を与えてくださったことは大きな成果であった。

このようにわれわれのソーシャルワーク実践を取り巻く厳しい情勢の中にあつて、香川大会が色々な角度からの新鮮で素晴らしいアプローチと手がかりを確保する貴重な機会となった。今後は、これらの成果を内なる世界から醸成し、発展させる責務がJASW協会に課せられたといえるであろう。

ところで、ものや事象について、角度を変えて見ることを「視差」という言葉で表現されることがあるが、会報102号でも指摘したように昨今の激変する社会情勢を反映して生活課題は益々多様化、複雑化、複合化の様相を示すことになり、その対応においても多角化、多元化、総合化、包括化が希求される時代となっている。

とりわけ、現実の喫緊課題としての社会福祉法人の制度改正によつて、施設・機関の運営、管理、経営の基本原則を見直しする必要にせまられている。詳細は紙幅の関係から



改めて述べるとすることにした。したがって、ここでは、ソーシャルワークは専門的な視点から生活課題という現象を見る前提条件として、複眼的視野でトータルに見ていくことの必要性をのべたが、今大会の「視差」によるアプローチが生活課題の見え方に対して、極めて貴重でかつ重要な示唆を提供してくれたといえるべきである。

これまで、ソーシャルワークは、改革、改良、救済、保護、援助、支援、調整、弁護、開発、教育などの機能を駆使して、様々な問題解決・緩和に一連の努力してきた。この成果を尊重するとともに新たな視差の提示によつて、ソーシャルワークにおける新地平 (new horizons) が見えて

きたといわなければならない。これを支える社会福祉学もこれまでも学際化、融合化が叫ばれ、新たな研究方法論の創生が期待されているところであるが、一方では、オープン・サイエンス (open science) あるいは市民科学 (citizen science) と呼ばれる、誰でもが学問や研究活動に参画できる場と機会を用意する方向が提示されている。ソーシャルワークのように住民の現実的で具体的な生活問題に取り組んでいる専門領域では、「目から鱗」とでもいえるべき発想の転換になりうるものであるといえるであろう。現時点では、自然科学の領域に留まっているような印象を受けるが、民俗学や社会学、文化人類学、生態学、社会福祉学など人文、社会科学においても新たな局面を切り開く極めて重要な考え方であるといえるであろう。

今大会は多彩な専門家による視差から多くのことを学ぶことができたが、これを踏まえて、専門家以外の市井の人々の発想、着想、ヒント、アイデア、発見、発明など従来の開発という概念を一層拡大した視野をもつて、様々な「視差」からの文字通りの「示唆」がソーシャルワークの進化と発展に大きな力を与えて頂いたことを感謝し、明日からの実践活動につなげていくことを期待したい。